

巻頭言 「歌え」

宇野 元

時おり触れている教会暦は、アドベントから始まり、一年のキリスト者の歩みにつきそい、豊かに彩るものです。改革派教会においてもドイツやスイスなど歴史のある国や地域でよく用いられています。四季それぞれの特色と共に生きる私たちにとっても、日ごとの味わいが増すと思います。今年2月の月報に、受難節の日曜日について記してみました。イースターからペンテコステまでの日曜日にも聖書に基づく名前がつけられています。ここでは名前と聖句箇所のみ紹介します。なお日本語の聖句と若干のずれがあるのは、ラテン語訳によるからです。新生（1ペトロ2, 2）。主の慈しみ（詩編89, 2）。喜べ（詩編66, 1）。歌え（詩編98, 1）。祈れ（詩編66, 20）。聞いてください（詩編27, 7）。

福音を喜び、宣べ伝える、慈しみ深い神を感謝する、また祈ることへの招きと並んで歌うことが強調されています。歌え。そしてこのすすめが一つの日曜日の名前になっているのに心がとまります。カンターテという言葉です。クラシック音楽の一形式である「カンタータ」と重なります。バッハのすばらしい作品の数々が思い起こされるでしょう。

また、聖書の印象的なエピソードが思い起こされます。歌え。病めるサウルの傍らで、ダビデは豎琴を奏でながら詩篇を歌ったでしょう。するとサウルの重い心は軽やかにされました。音楽の力、とりわけ歌がもつ癒しの力が示されています（サムエル記上16, 14以下）。ダビデ自身、自らの心に向けて歌うこと幾たびであったかと思いません。夜、孤独が身にしみるとき。命の危険が迫るなか、洞窟に隠れているとき。苦しいときに自分のために歌う。さらに、自分のための歌が他者のためにも用いられる。サウルの傍らで歌うダビデは、サウルと共に大きな幸いにあずかりました。

私たちも……。いや、私はダビデのようじゃない。楽器は演奏できないし、きれいな声をしていない。またダビデのように見目麗しくない。だからダビデのように歌えない。——わが心よ、どうしてそう思うのか？ 何を美しさの基準にしているのか？ 聖書によれば、美しく見えないものが美しいものになっているのではないか。御子の十字架ほどに美しいものはなく、御子を信じ、たたえる歌は美しい。そして私たちは御子の献身により、このうえなく美しい歌を歌うのにふさわしい者にされているのではないか。